青陵

第157号

二〇一九年六月七日発行
発行者　奈良県立橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者　鈴木裕明

橿原考古学研究所の副所長となって

米田康彦

本年四月の人事異動により、副所長の大任を仰せつかりました。

私と文化財とのこれまでの関わりは、平成一九年から約四年間、文化財保存課で課長補佐として勤務したことがあげられます。それ以前にも教育委員会事務局での勤務があり、文化財保存課は教委の中では特殊な部署との認識はありましたが、業務内容をほとんど理解していないままでの東京事務所からの異動でした。総務担当課長補佐として、業務全般のとりまとめと雑務が所掌事務でしたが、着任時の文化財への興味は限られており、休日に寺社仏閣を訪ね歩く程度でした。まして考古学となると、子どもの頃に高松塚古墳の壁画が話題となり、家族で出かけた思い出ぐらいでした。

文化財保存課に勤務してみますと、「奈良県内の文化財について何も知らない」自分に気づきました。当時、唐招提寺の金堂の解体修理が行われており、所掌する文化財保存事務所の出張所も設置されていましたが、修理の中身になると何も知らない状況でした。法隆寺・談山神社・當麻寺・宝山寺で行われていた修理についても同様でした。史跡では、桜井茶臼山古墳の発掘や、飛鳥京跡苑池の土地の買上げと整備の検討がはじまるところでした。また、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備前であり、キトラ古墳の買収にも携わりましたが、史跡の内容となると知らないことのほうが多かったです。

文化財の専門職の皆さんは、知識が豊富で物腰の柔らかな方ばかりで、美術工芸・民俗・建造物そして考古学からみた奈良県の文化財について、奈良県生まれで何十年暮らしているにもかかわらず何の知識もない私に、懇切丁寧にご教授していただきました。そうしたお支えを得て、予算等の執行管理や他の行政機関との調整が難しい局面も乗り越えられたことを覚えています。文化財に関連した仕事には、厳しい中にもどこか穏やかさがあることを感じました。

さて、橿原考古学研究所は昨年創立八〇周年を迎え、附属博物館は竣工以来となる設備改修工事に入っています。今後の橿考研の発展の上で、極めて重要な時期です。副所長として、歴史ある橿考研が引き続き奈良県の考古学の中心として継続発展するために、これまでの八〇年を振り返り、歩むべき方向を深く考えなければならないと気を引き締めています。

荒井正吾知事は、県の主要施策の一つに観光を掲げられ、不足するハード面、ソフト面への対策として、奈良県らしさをもった宿泊施設や交通網整備等をはじめとする事業を展開しておられます。奈良県での開発事業で前段階に発掘調査が必要な場合、大規模なものの多くは橿考研が担ってきました。今後もそのことは変わることがないでしょう。開発と保存・活用は、一体となって進めていくことが重要です。また、日本の悠久の歴史の中で解明出来ていない事柄が、奈良県の遺跡には多く眠っています。確かな技術で丁寧に調査研究を進めていくことも、将来の文化資源活用にとって重要になります。創立八〇周年以降の橿考研の新たな出発には、職員間での情報の共有と、それに基づいたしっかりした議論が基礎になると考えます。

橿考研の皆さまの顔と名前と仕事が未だ一致しない状態ですが、対話を通じて前に進み、微力ながらも橿考研の一員として心して努める所存ですので、宜しくお願いを申し上げ、粗辞ではありますが就任のご挨拶とさせていただきます。

目次

橿原考古学研究所の副所長となって　米田康彦　1
石神遺跡出土の須恵器甕　木村理恵　2
奈良県立橿原考古学研究所研修報告　劉斌　5
人の動き・海外交流など　編集部　8
附属博物館展示案内　編集部　8

石神遺跡出土の須恵器甕

木村理恵

一、はじめに

石神遺跡は、高市郡明日香村飛鳥に所在する遺跡で、一九八一年以降の奈良国立文化財研究所（現・奈良文化財研究所）の継続的な発掘調査により、七世紀前半から藤原宮期まで、度重なる改造を経て使用されていたことが明らかとなっている。蝦夷をはじめとする辺境の民や韓半島からの使節に対する饗宴の場として利用されたといわれる。

今回報告するのは、二〇一五年に石神遺跡内で実施した旧飛鳥小学校跡地の衛星通信装置設置に伴う立会調査で出土した須恵器である。

二、調査概要

調査地は、石神遺跡第七次調査で検出された石敷遺構ＳＸ一三一〇のすぐ西側に位置する（図１）。基本層序は、現地表下七〇cmが近現代造成土、一〇cm程度の旧耕土、床土がそれぞれあり、その下に褐色砂混粘質土を確認した。出土遺物等からこの層を古代の整地土と評価した。整地土上面で土坑ＳＫ１を確認した（図２）。

三、出土遺物

整地層およびＳＫ１からは、土師器・須恵器が出土した。このうち図化できたものが図３である。１は須恵器杯Ｂ蓋である。つまみの特徴などから、七世紀後半～八世紀初頭頃に通有の形といえる。２は須恵器杯、３は須恵器杯Ｂである。３は底

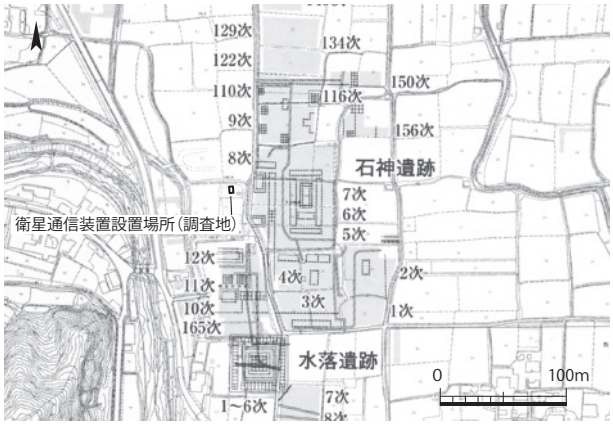


図１　石神遺跡調査位置図（1：6000）
（『奈良文化財研究所紀要2017』掲載地図を一部改変）

写真１　調査状況（南から）

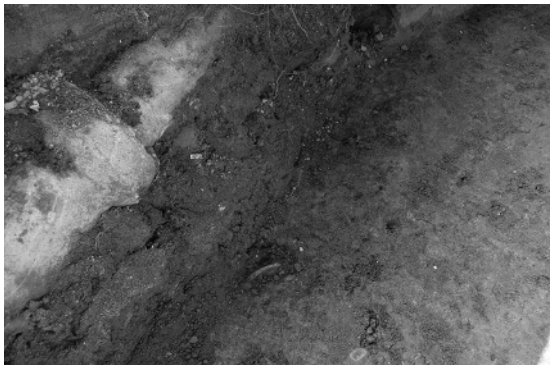


写真２　土坑ＳＫ１検出状況（南東から）

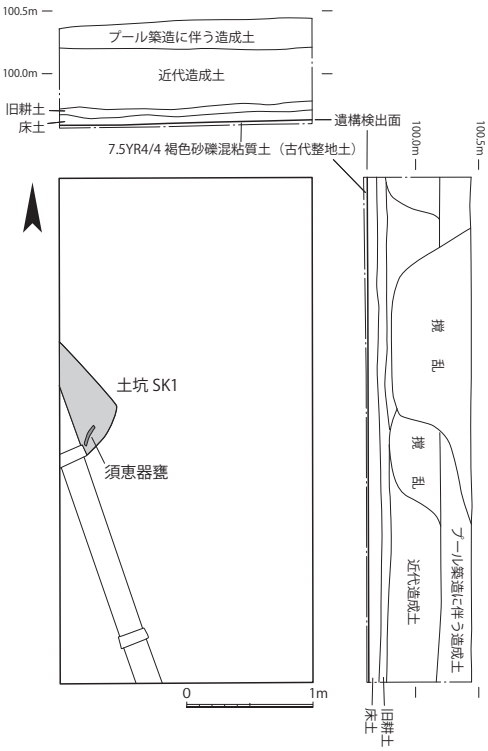


図２　調査区平面・断面図（1：60）

部の器壁が厚く丸みをもつ点や、高台の形などから、七世紀後半～八世紀初頭のものであろう。4は須恵器甕である。口径が二二㎝、口縁端部の断面形が四角形状を呈する。頸部が五～六世紀代のものより短く、体部外面には平行タタキの上にカキメ痕跡が確認できる。

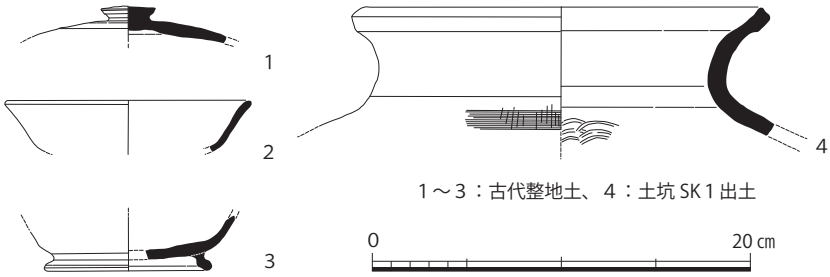
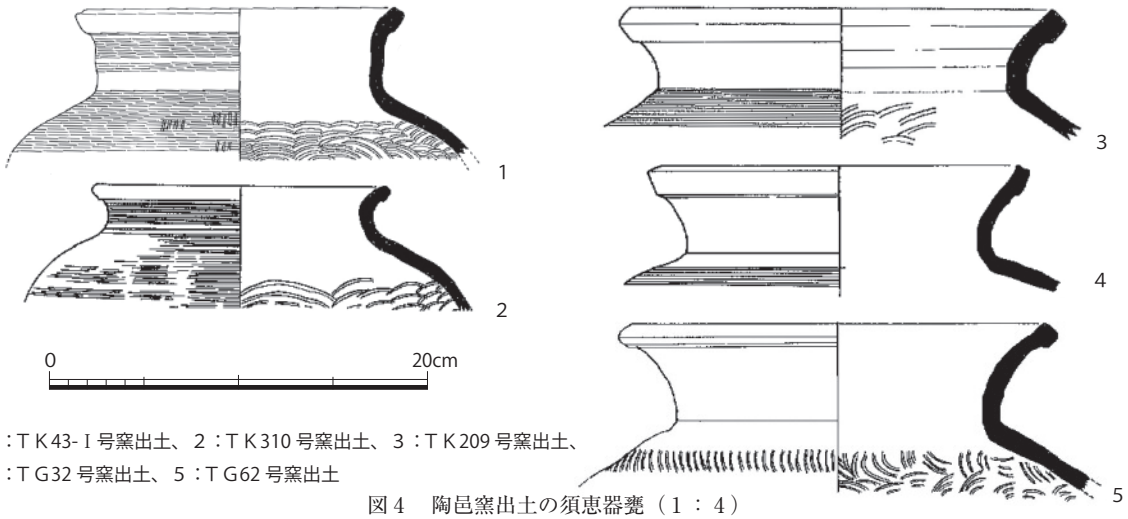


図3　石神遺跡出土須恵器（1：4）



1：TK43-Ⅰ号窯出土、2：TK310 号窯出土、3：TK209 号窯出土、
4：TG32 号窯出土、5：TG62 号窯出土

図4　陶邑窯出土の須恵器甕（1：4）

四、「角縁口縁」須恵器甕の検討

図3―4のような特徴を有する甕は、七世紀代によくみられ、飛鳥・藤原地域でも多く出土する。生産地の候補は、大阪府南部の陶邑窯跡群やその影響下で成立した窯跡と考えられる。口縁端部の断面形状が四角形または三角形のものが多くみられ、ここでは「角縁口縁」と仮称しておく。飛鳥・藤原地域での類品は、表1・図5で示した通りである。中・小型の甕に多い口縁形態であるが、口径四〇㎝を超える大型甕にもみられる。

備前・邑久窯跡群の須恵器甕にも同様の口縁形態がみられ、陶邑窯の栂（TG）地区との類似性が指摘されている（亀田二〇一八）。亀田氏は「コの字」口縁とする。栂地区で目立つようであるが、高蔵寺（TK）地区でもみられ、角縁口縁は陶邑窯の甕口縁の形態としては主流であったと考えられる（図4）。また角縁口縁と類似した硯脚部が陶邑窯産の可能性が高いことが指摘されている（三好二〇一二）。同じ工人が製作に関わっていたことが推測できる。

平安時代においても、角縁口縁は存在し、図4で示したような七世紀代のものから、型式変化を遂げている。甕口頸部の形態は、甕体部のタタキやあて具痕跡に加え、工人差・産地差および時期変遷を知るための重要な属性といえる。

角縁口縁をもつ甕の用途としては、水などの液体をいれる貯蔵容器、または酒造りをはじめとする醸造関係で使用した容器など、様々な用途が想定でき、須恵器甕が七世紀の宮都においても必要不可欠のものであったことがわかる。

引用・参考文献

大阪府教育委員会　一九七八『陶邑Ⅱ』
大阪府教育委員会　一九七九『陶邑Ⅳ』
大阪府教育委員会　一九八〇『陶邑Ⅴ』
亀田修一　二〇一八「備前邑久窯跡群の須恵器甕に関する覚書」『半田山地理考古』第六号　岡山理科大学地理考古学研究会
奈良国立文化財研究所　一九八八「石神遺跡第七次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一八』
平安学園考古学クラブ　一九六六『陶邑古窯址群Ⅰ』
三好美穂　二〇一二「平城京の陶硯」『奈良市埋蔵文化財調査年報平成二一（二〇〇九）年度』奈良市教育委員会

表１　飛鳥・藤原地域出土の「角縁口縁」須恵器甕

遺跡名	遺構名･時期	原典図版番号･口径(cm)	本稿	報告書
石神遺跡	土坑ＳＫ１ （７世紀後半～８世紀初頭）	図３-４(22.0)	図３-４	本報告（調査番号015058）
石神遺跡	ＳＤ335・435（７世紀中頃）	図６-26(20.8)	図５-３	奈良国立文化財研究所1983『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』
水落遺跡	貼石遺構ＳＢ200周辺	PL38-98(21.1)		奈良国立文化財研究所1995『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ－飛鳥水落遺跡の調査－』
甘樫丘東麓遺跡	炭溜りＳＵ250 （７世紀前半～中頃）	図156-15(21.5)		奈良文化財研究所2013『奈良文化財研究所紀要2013』
甘樫丘東麓遺跡	第177次出土堆積土 （７世紀半ば）	図Ⅱ-46-74(17.3)	図５-６	奈良文化財研究所2014『奈良文化財研究所紀要2014』
飛鳥京跡	石組溝ＳＤ0315 （７世紀後半～８世紀初頭）	図40-８(25.0) 図45-５(23.4)	図５-４	奈良県立橿原考古学研究所2011『飛鳥京跡Ⅳ』
飛鳥京跡苑池	南池ＳＧ9801（７世紀後半）	図86-52(24.0)		奈良県立橿原考古学研究所2012『史跡・名勝飛鳥京跡苑池（１）』
藤原京左京六条三坊	ＳＤ4130上層（平安時代）	Pl.29-931(23.0)	図５-５	奈良文化財研究所2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』
藤原京左京六条三坊	ＳＤ4130中層（奈良時代）	Pl.26-864(16.3)、Pl.26-865(17.0)、Pl.25-858(18.4)、Pl.26-866(18.7)、Pl.26-867(20.0)、Pl.26-871(25.4)	図５-１	奈良文化財研究所2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』
藤原京左京六条三坊	ＳＤ4130下層（７世紀）	Pl.16-741(20.1)、Pl.16-737(23.2)、Pl.16-744(37.9)、Pl.16-739(44.0)		奈良文化財研究所2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ－藤原京左京六条三坊の調査－』
藤原京右京十一条三坊・左京十一条一坊	溝62 （７世紀後半～８世紀初頭）	図116-931(19.8)	図５-２	奈良県立橿原考古学研究所2017『藤原京右京十一条三坊・左京十一条一坊－県道橿原神宮東口停車場飛鳥線建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅳ－』

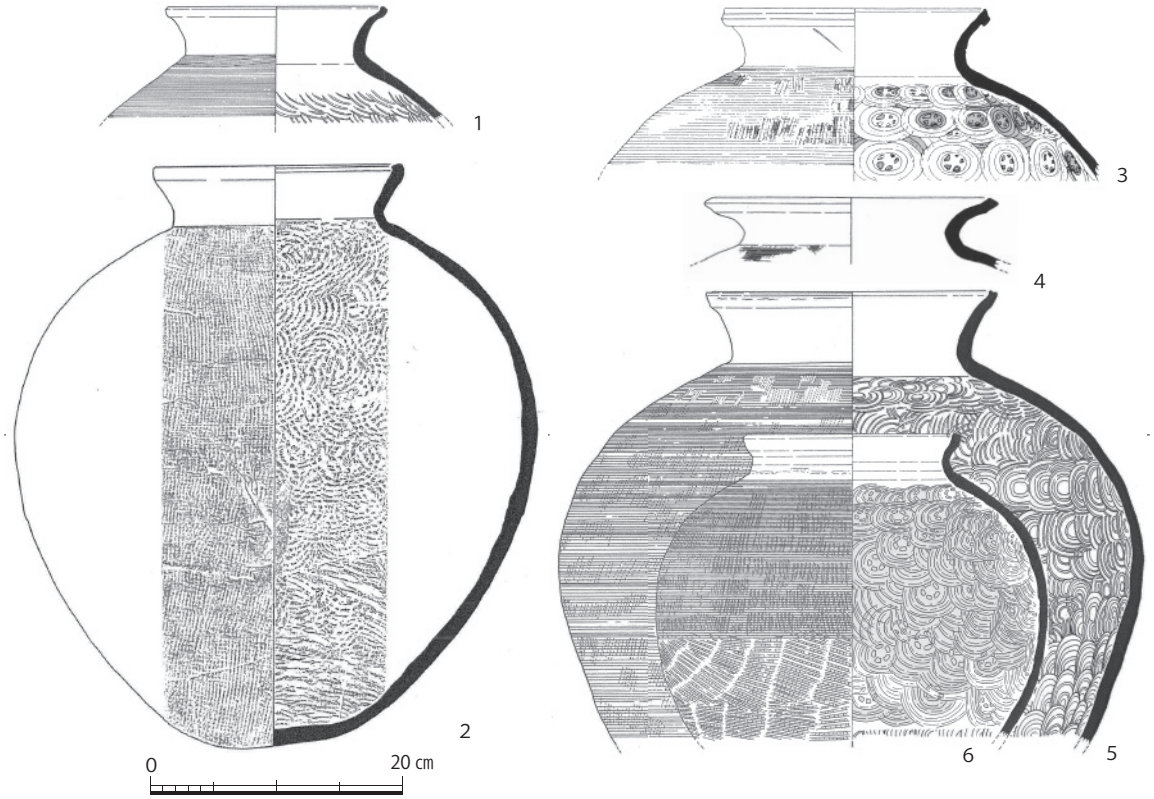


図５　飛鳥・藤原地域の「角縁口縁」須恵器甕（１：６）

奈良県立橿原考古学研究所研修報告

西北大学文化遺産学院　劉　斌

一、はじめに

二〇一八年九月二五日から二〇一九年三月一五日まで、私は奈良県立橿原考古学研究所において約半年間研修しました。広義の研修目的は日本考古学の最新の理論と技術を学ぶことにありましたが、私個人の具体的な研修課題としては、日本考古学が中国初期の考古学学術用語に与えた影響を研究することにありました。

以下では、私の半年間の日本での生活・研修状況について報告します。

二、日本語学習

日本に来る前には、私は日本語の簡単なあいさつ程度しかできませんでした。日本での生活と研修をさらに順調に進めるために、二〇一八年一〇月から二〇一九年二月まで、私は国際交流センター橿原校で初級日本語を学びました。日本語教室の先生は橿原市及び周辺の日本人ボランティアで、私は三名の先生方に教えていただきました。先生方は非常にまじめかつ熱心でしたが、私自身の努力が足りず、その上研究会参加や見学旅行などで度々欠席して少なからず課程が遅れたため、教室では十分に日本語を習得できませんでした。

すでに中国語の基礎がある橿原考古学研究所所員の方々もさらにいっそう語学力を高めたいとのことで、私たちは相互学習を行いました。私は彼らに中国語を教え、彼らは私に日本語を教えてくれました。毎週火曜日の夜には私と木村理恵さんが相互学習し、木曜日の夜には米川裕治さん・木村さん・齊藤希さんとともに『考古学―理論・方法・実践』という書籍を中国語・英語・日本語の三ヶ国語で講読しました。しかし残念なことに橿原考古学研究所での研修においても、私は十分に日本語を習得することができませんでした。その主たる原因は、日本語学習への積極性や努力が足りなかったからだと思います。日本に滞在して、本来良好な言語習得の環境があり、またそのための機会が用意されていたにもかかわらずです。橿原考古学研究所には中国語を習得した所員が多数おり、その環境に甘えてしまい彼らから積極的に日本語を学ぶのではなく、中国語の会話を常としてしまいました。本来は相互学習のはずでしたが、最後には中国語の講義になっていました。半年が経過すると、一緒に学んだ研究所所員の中国語は明らかに向上していましたが、私の日本語は少しも進歩しませんでした。

一九九〇年代、西北大学の複数の先生方が、橿原考古学研究所で一年間研修されました。一から努力して日本語を学び、最終的には日本語資料を用いた考古学研究が可能となり、研究領域を広げて、自身の研究水準を向上させました。それに比べ、私は日本に滞在するという好条件を十分に活用できませんでした。日本語を習得することができなかったことが、私の今回の研修の最大の失敗であり残念に思うところです。

三、発掘調査

一九二〇年代末に、中国と日本の研究者によって「東方考古学協会」が結成され、共同して中国国内の複数の遺跡が発掘調査されました。また中国では、八〇年代末に日本の文化庁による「埋蔵文化財 発掘調査の手びき」が翻訳され、九〇年代からは奈良文化財研究所などの機関との共同発掘調査が実施されました。しかし、多くの中国人考古学者は日本の発掘調査の方法を依然としてよく知らないのが実情です。私は日本に行く前から、日本の発掘調査に参加することを強く望んでいました。日本の埋蔵文化財調査機関の発掘調査の方法を学びたかったのです。

二〇一八年一一月中旬から一二月中旬にかけて、私は幸運にも橿原市四条遺跡の発掘調査に参加することができ、日本の発掘調査の方法を間近でみることができました。私自身も掘立柱建物の柱穴や井戸、土坑などの各種遺構を調査し、土器や木器などの遺物整理も行いました。全体的には、日本と中国の発掘調査の方法はとてもよく似ていて、たとえば遺構埋土の土層観察のために、遺構を半截あるいは四分割して発掘していることがあげられます。ただしいくつかの細かい違いもあります。

以下、箇条書きで例をあげます。

・日本の発掘調査では、土層断面を重視し、断面観察できる場所を多く設けています。大型の溝のような遺構では、常に複数の断面観察用の畦を設置しています。中国ではこのような方法はあまりみられません。

・遺構の壁面を精査するとき、中国

では自然に切り離される面を重視し（すなわち中国式移植ゴテで壁面を精査する作業では、できるだけ壁面に付着している堆積土が自然に剥離するようにし、工具痕のない自然面があらわれるようにします）、通常中国式移植ゴテは直接壁面に触れない形になります。一方日本では発掘用の工具で壁面を薄く削り、壁面上の埋土を完全に削り取り、工具で削られたきれいな壁面を露出させます。

・中国の発掘調査で使用する主要な道具は中国式移植ゴテです。日本の発掘調査で使用する道具は豊富で、目的に応じて細分化しています。

写真1　四条遺跡発掘調査現場と著者

・ボーリング掘削具（洛陽鏟）の使用について、地下の堆積状況が不明なとき、中国では通常洛陽鏟によるボーリング調査を行うことで、すぐに遺跡の種類・数量・大きさ・深さなどを把握することができます。日本では通常洛陽鏟によるボーリング調査は行っていません。

以上が、私がみた中国と日本の発掘調査における相違点です。私は中国と日本双方の発掘方法・技術は、お互い参考にすることができると思いました。例えば、中国では近年の甘粛省臨潭磨溝墓地の発掘調査のなかで、日本の古墳の断面調査の方法を参考にして、多重埋葬における墓坑の重複関係などの情報を得ることに成功しました。遺跡の確認調査において、中国のボーリング調査は、より労力をかけずに早く結果を得ることができるので、日本で試してみてもいいのではないかと思います。

四、パブリック・アーケオロジー

ここ数年来、中国においてパブリック・アーケオロジーがますます盛んになっています。考古学の研究機関が、一般の方々に向けて考古学を宣伝し大衆化することを重視しはじめています。将来的には複雑な考古学の研究成果をわかりやすく解説して、もっとたくさんの方々が考古学を理解し、考古学者の仕事を支持してもらうことを期待しています。

私は中国ではあまりパブリック・アーケオロジーの活動に参加したことがありませんでしたが、今回の研修では、飛鳥京跡苑池や四条遺跡の発掘現場の現地説明会に参加し、一般の方々を対象にした大規模な考古学の公開講演会にも参加しました。飛鳥京跡苑池の現地説明会では、一日の見学者数は約八〇〇人、四条遺跡の現地説明会では、一日の見学者数は約四〇〇人、公開講演会の聴衆は約五三〇人でほぼ満員でした。

このような橿原考古学研究所の組織的なパブリック・アーケオロジーの活動において、私がとても強い印象をもったのは、綿密な作業計画を立てて準備をしていたことです。所員はいくつかのグループ分かれて、受付、現場の解説・案内、誘導などをそれぞれ担当します。事故などを防ぐために、現場の見学導線にも人員が配置され、緊急時にはすぐに対応できるようになっています。それぞれの担当の割り当てと準備が非常に念入りに行われています。これは日本人が事に当たるときのまじめさをあらわしており、我々も学ぶべきことです。

五、博物館参観

日本で研修した半年の間に、橿原考古学研究所の所員に連れられて、多くの博物館を参観しました。橿原考古学研究所附属博物館をはじめ、奈良県では奈良国立博物館、奈良文化財研究所平城宮跡資料館・飛鳥資料館、東京都では東京国立博物館、国立科学博物館、江戸東京博物館、千葉県では国立歴史民俗博物館、郭沫若記念館、福岡県では九州国立博物館、福岡市博物館、そのほか大阪歴史博物館、兵庫県立考古博物館、佐賀県立九州陶磁文化館などがあげられます。

江戸東京博物館の展示には、復元した江戸時代の民衆の生活・祭事・商業活動などの各種場面、また当時の芝居・寄席などの演芸を行う人の表現があって、とても生き生きとして観覧者を引きつける内容となっていました。このような日本の博物館の豊かで鮮やかな展示が、深く印象に残っています。

兵庫県立考古博物館では、建物に独特な美しさを感じ、館内では復元展示された古墳の大型石棺、航海用の木製準構造船をはじめとしたとても面白い展示でした。しかしさらに

印象に残ったのは、博物館の出土品の保存・保管についてでした。兵庫県では毎年多数の発掘調査を実施し、すでに数百冊の発掘調査報告書を出版しています。収蔵庫内には数十万箱の発掘調査出土品が収蔵されていますが、収蔵庫の管理はとても整然としていました。刊行された発掘調査報告書に掲載されている遺物はいかなるものでも、短時間のうちに膨大な収蔵品のなかから実物を見つけ出すことができ、さらにその遺物実測図の図面などの資料も容易に見ることができました。これには私は大変驚きました。中国においては、発掘調査出土品の整理作業が終了した後に、これらの遺物を安全な文化財収蔵庫に保管することはできますが、収蔵庫の面積や管理方法に限界があり、報告書に掲載された遺物を探し出したいとしても、時にとても困難な場合があります。文化財の収蔵・管理では、中国が日本に学ぶべきところがたくさんあると感じました。

六、個人研究

①資料収集

橿原考古学研究所の蔵書はとても豊富で、二階書庫は私が所内で最も通い詰めた場所です。書庫にいて、一棚一棚の貴重な蔵書を見ていると、私はとても幸せを感じました。私の今回の訪日の研究テーマは、中国の初期考古学学術用語に対する日本の影響で、そのために日本の一九世紀末の初期考古学の文献を調べる必要がありました。中国国内でこれらの資料を探すのは困難でしたが、橿原考古学研究所には大量にこの種の資料（復刻版を含む）がありました。私は多くの必要な資料をスキャンまたは撮影しました。これらの貴重で得難い資料は、私の研究テーマにとって信頼性の高い基礎資料となります。今回の訪日研修の機会が無ければ、私にはこのテーマの研究を進める方策はなかったと思います。

②研究発表

日本での半年間で、私は三回の研究発表を行いました。二〇一八年一一月には、橿原考古学研究所で「中国考古学の発展のなかのソ連の影響」と題した研究発表を行い、主に一九五〇～六〇年代のソ連のいわゆるマルクス主義考古学が中国考古学に対して与えた重要な影響について述べました。発表の後に、聴講していた研究所の川上洋一さん、米川裕治さんなど数名の所員から、マルクス主義は日本の考古学研究に対してもかつて重要な影響があったことを聞きました。これは私が認識していなかったことでした。米川さんは私に関連する論文のコピーを提供してくれただけでなく、前述のように木村さん、齊藤さんとともに四人でマルクス主義考古学の資料を講読する機会を設けていただきました。これは私にとってとても有益なことでした。

二〇一九年二月初めには川上さんと京都大学人文科学研究所の岡村秀典教授を、同月下旬には齊藤さんと九州大学の宮本一夫教授をそれぞれ訪ね、「中国初期の考古学学術用語の形成―日本考古学の中国初期の考古学学術用語に対する影響―」と題した研究発表を行いました。岡村秀典先生と宮本一夫先生は著名な考古学者で、中国考古学に対しても博識で、緻密な研究をされています。先生方と議論することによって、私はとても啓発を受けました。例えば宮本一夫先生からは日本の用語が朝鮮に対しても同様な影響を与えていることなどをご教示いただきました。

写真2　九州大学での研究発表

七、おわりに

私は日本に来る前、日本について、熟知しているところとそうではないところがありました。熟知のところは、小さい頃から継続的に映画、テレビ、書籍を通じて触れていた日本文化のことです。アニメ「一休さん」・「ドラえもん」、ドラマ「東京ラブストリー」・「深夜食堂」、映画「七人の侍」などは、非常に印象深く、これらから日本の社会と文化を知ることができました。一方で日本は私にとってなじみのないところでもあり、日本に来る前、私は日本人を誰一人知らず、スクリーンや書籍の外の真の日本は知りませんでした。そのため私が日本へ行って研修することになった時、日本考古学を理解することだけでなく、真の日本の社会と日本人を理解したいと思いました。

日本で研修したこの半年のなかで、

言葉の上でとても大きな障害があったとはいえ、橿原考古学研究所、博物館等の見学、語学研修での日本の友人との交流や、日々の奈良での生活体験、さらには東京・京都・大阪・九州などの旅行を通じて、私は日本に対して一定の理解を得ることができました。日本の文化遺産の保護はとても素晴らしく、近代化の水準はとても高く、民衆の資質はとても良く、伝統と現代性の組み合わせの調和がとれたとても良い国だと思いました。将来の中国が、さらに自国の歴史文化を重視し、日本のように文明的で、進歩的で、豊かになることを望んでいます。

写真3　日本の茶道体験

人の動き

〔退職　平成三一年三月三一日付〕
畑田　道矢　副所長（定年）
→公益財団法人　奈良県生活衛生営業指導センター

〔転出　平成三一年三月三一日付〕
吉田　敦世　総務課主任主査
→中和土木事務所主任主査
今西　隆宏　総務課主査
→ならの観光力向上課主査
岡見　知紀　調査課主任研究員
→なら歴史芸術文化村整備推進室主査

〔採用　平成三一年四月一日付〕
米田　敏幸　調査課嘱託

〔転入　平成三一年四月一日付〕
米田　康彦　うだ・アニマルパーク振興室長
→副所長
榊本　保　農村振興課主任主査
→総務課主任主査
仲西　高司　奈良西養護学校係長
→総務課主査（再任用）
北山　峰生　文化財保存課主査
→調査課指導研究員

〔昇任　平成三一年四月一日付〕
高木　清生　企画課主任研究員
→企画課指導研究員
絹畠　歩　調査課主任技師
→調査課主任研究員
鈴木　朋美　調査課主任技師
→調査課主任研究員
河﨑　衣美　資料課主任技師
→資料課主任研究員

海外交流など

派遣：中国陝西省（西北大学・陝西省考古研究院）へ派遣していた北井利幸所員は三月一五日に、韓国国立文化財研究所へ派遣していた岩越陽平所員は三月一九日に、それぞれ研修を終え、帰国しました。

受入：昨年九月から研修されていた陝西省西北大学文化遺産学院の劉斌氏は、三月一五日に帰国されました。

一月から研修されていた韓国国立扶余文化財研究所の洪パルグン氏は、三月一五日に帰国されました。

陝西省考古研究院の于春雷氏・耿慶剛氏が、二月一二日から三月十三日まで研修されました。

平成二八年度より日本学術振興会特別研究員として、当研究所で宇宙線ミューオンラジオグラフィーを応用した文化財研究に従事していた石黒勝己氏は、昨年度末で任期満了となりました。引き続き当研究所特別研究員として当該研究を推進します。

附属博物館展示案内

施設改修のため昨年一二月二四日より休館していますが、博物館では休館中も次の展覧会を開催します。

葛城市歴史博物館共同企画

「発掘　葛城山麓の古墳
―奈良県立橿原考古学研究所附属博物館館蔵品里帰り展―」

開催期間：令和元年五月一一日（土）～六月三〇日（日）
開催場所：葛城市歴史博物館

出張企画展

「発掘　古代の宮滝遺跡」

開催期間：令和元年七月二〇日（土）～九月一六日（月・祝）
開催場所：吉野歴史資料館

東京新聞・古代オリエント博物館共催

「しきしまの大和へ」

開催期間：令和元年一〇月五日（土）～一二月一日（日）
開催場所：古代オリエント博物館